

はじめに

病院長 小川 潔

2016年は埼玉県立小児医療センターにとりましてさいたま新都心へ移転しただけでなく、体制も大きく変わり、まさに生まれ変わった年となりました。

1995年1月に発生した阪神・淡路大震災を契機に「建築物の耐震改修の促進に関する法律」が制定され、2007年3月に本県においても建築物耐震化改修促進計画が制定されました。県立病院は「防災上重要な県有建築物」とされ、2008年度までに耐震診断を完了し、2011年度までに耐震改修を完了することとなりました。1982年に当センターが竣工する前年に建築基準法施行令が改正され、耐震規定が改正されたこともあり、当センターは耐震基準を満たしていませんでした。2008年10月8日に城病院長（当時）を中心に第1回耐震化検討委員会が開催されました。さらに、耐震化だけでなく、建て直しも含めた広い視点からの検討が必要であるとして、2009年1月8日に第1回埼玉県立小児医療センターあり方検討会が開催されました。議論を重ねた結果、さいたま新都心へ移転し、さいたま赤十字病院と一体となった医療拠点整備が決定され、2011年6月に発表されました。さらに、2012年2月には岩槻区に病院の一部機能を残すことが発表されました。そして、第1回耐震化検討委員会から8年を費やして、2016年12月27日にさいたま新都心へ移転が行われたわけがあります。移転に際しては「安心・安全な移転」を合言葉に、多くの関係機関のご協力のもとに無事に患者さんの移送を行うことができました。

時あたかも新しい病院を見届けたかのように、埼玉県立小児医療センターを作ったともいえる森彪名誉総長が2016年11月12日に逝去されました。10月15日に開催された新病院の竣工式・記念式典に出席された後に体調を崩され、急逝されました。膵臓がんでした。1967年（昭和42年）8月に全国で3番目の小児専門医療施設として開設された埼玉県立小児保健センターの初代所長として埼玉県における小児医療の基礎を築かれ、埼玉県立小児医療センターへと発展させるために強いリーダーシップを発揮されました。小児医療センターでも1983年から1989年まで病院長、1990年から1993年まで総長として勤務され、多くの人材を育てられました。退職されてからも小児医療センターの精神的な拠り所となり、折に触れて貴重なご指導をいただきました。さらに、2017年3月をもって花田良二副病院長も定年退官となり、開院以来の医師は皆さん退職されたことになり、文字通り小児医療センターは次世代へ進んだといえるでしょう。

開院以来34年が経過しようとしています。この間に医学や医療だけでなく医療を取り巻く状況も大きく変わりました。変化の速度は加速度的に速く、医療体制だけでなく医療倫理も追いつかない状況にあります。歴史の流れはゆっくりで、その渦中にあるものは変化に気づかずに生活していることが多いとされていますが、現代においてはその変化が急激で大きいため同時代に肌で感じるようになるようになったと思われまます。遺伝子解析技術の進歩により、次々に原因遺伝子が解明されていますし、ワクチンの増加と新しい喘息治療薬の登場により2次病院小児科病棟は急速に入院患者数が減ってきています。また、胎児診断の普及により周産期管理が当たり前になり、患者さんの流れが一変しました。2009年1月8日に第1回埼玉県立小児医療センターあり方検討会が開催された時と比べても医療をとりまく環境は変わっていきっています。急速な変化は医療だけではありません。白物家電と呼ばれる家庭電化製品が頭打ちになり、一流の企業があつという間に倒産の危機に陥っています。

小児医療センターは生まれ変わります。建物だけでなく、中も生まれ変わらなければなりません。疾病構造が変わり、小児人口が減る中で小児医療センターがどうあるべきなのかを自問しながら柔軟に対応していかなければならないでしょう。周産期母子総合医療センターの設置、小児集中治療室新設、小児救命救急センター設置、感染対応病室新設、無菌病床拡充、手術室増室、救急指定の

取得と様々な新しい体制を導入しました。新病院では重症病室が100室を越えます。様々な需要予測から計画されたものではありませんが、将来予測は変化が急速である現代では非常に難しいのが現状でしょう。幸い移転後の3カ月間の病床利用は急速に上昇してきています。看護師不足から288床で運用を開始していますが、2017年3月には病床利用率76.6%（288床で算出すると84%）となり、68.8%との当初予想を大きく上回りました。予想に反して救急患者の半数近くが外傷の患者さんです。虐待の患者さんも急速に増えています。胎児診断例も急速に増加し、ベッドコントロールに頭を悩ませるといううれしい悲鳴をあげています。

7階に設置されましたけやき特別支援学校では、子どもたちが新しい教室で楽しく学校生活送っています。エレベーターで病室から通学できますので暑さ寒さも気になりません。全国からの視察が続いています。ドナルド・マクドナルド・ハウスさいたまも利用率が80%を越え、利用できない方がでてきています。

一方、新病院になり多くの課題が明らかになってきています。駐車場の待ち時間や案内表示の不足といった建物のハード面の問題、会計窓口の待ち時間などの運用面での問題など解決すべき課題が山積しています。多くの病院長への手紙を頂戴しています。また、移転に伴う周辺医療機関との連携構築や、附属岩槻診療所の医療法人への移行も大きな課題です。ひとつずつ丹念に対応していくしかないと考えています。

新病院ならびに旧病院の整備には、近隣の医療機関、行政機関、地域住民の皆さまなど数多くの関係各位のご指導が不可欠です。これからも指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。